

『徒然草』——第一〇七段の研究——

A Study on the 107th Passage of *Tsurezuregusa* (Essays in Idleness)

土屋 博映

Hiroei TSUCHIYA

要 旨

『徒然草』第一〇七段は、作者兼好の女性論の代表として有名である。本書中には、少なからぬ女性論が見受けられるが、本段ほど過激に女性を非難している部分はない。なぜ本段のみこのように激しい女性への非難がみられるのか、それを追及し、次に他の段に存在する女性論も参考にし、兼好の女性意識はどのようなものであったかをさぐってみた。まず、本段を詳細に検討した。次に、本書中に存在する女性論について述べられている段をすべて取り上げ、検討した。すると、本段以外、とくに女性を過激に避難している段は存在しないことがわかった。作者は男性同様に、女性も基本的に批評の対象となるのだが、とくに男性の味方というわけでもないことがわかった。では本段がなぜに過激な女性非難となったのかというと、「亀山院の御時、しれたる女房ども」とあるところに、その原因があると推定された。「亀山院」は兼好の若きころには存命していたことが確実なので、他には見られない「女房」に、「しれたる」や「ども」を用いたところに、個人的な感情があったのかもしれないと推測されたのである。「しれたる」という強烈な言葉を用いていることから、そう考えてみた。最後に先学の説を参考に、「本段は兼好の女性論の非難の極限と位置づけ、他の段との関連をさらに考えることが必要」と結論付けた。

第一〇七段

一、全文

①(1)女^レの物言ひかけたる返事、とりあへずよきほどにする男は、(2)あ
りがたきものぞとて、亀山院の御時、(3)しれたる(4)女房ども、若き男
達の参らるる毎に、「郭公や聞き給へる」と問ひて、「こころみられけるに、
なにがしの大納言とかやは、「数ならぬ身は、え聞き候はず」と答へられ
けり。堀川内大臣殿は、「若倉にて聞きて候ひしやらん」と仰せられたり
けるを、「これは難なし。数ならぬ身、むつかし」など定めあはれけり。
②(5)すべて男をば、女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。「浄土寺
前関白殿は、幼くて、安喜門院のよく教へ参らせさせ給ひける故に、御
詞などのよきぞ」と、人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、「あや
しの下女の見奉るも、いとほづかしく、心づかひせらるる」とこそ、仰
せられけれ。(6)女のなき世なりせば、衣文も冠も、いかにもあれ、ひき
つくるふ人も侍らじ。
③(7)かく人にはぢらるる女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに、女の
性は皆(8)ひがめり。人我の相深く、貪欲甚だしく、ものの理を知らず、
ただ(9)迷ひの方に心も早く移り、詞も巧に、苦しからぬ事をも問ふ時は
言はず、用意あるかと思れば、又あさましき事まで、問はず語りに言ひ
出す。深くたばかり飾れる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、
その事、あとよりあらはるるを知らず。すなほならずして拙きものは女
なり。その心に随ひてよく思はれん事は、心憂かるべし。

④(10)されば、何かは女のはづかしからん。もし賢女あらば、それももの
うとく、すさまじかりなん。ただ(9)迷ひを主として、(11)かれに随ふ時、
(12)やさしくも、(13)おもしろくも覚ゆべき事なり。

本文は「日本古典文学全集」による。番号、傍線は筆者による。⁽¹⁾

二、第一〇七段の検証 ※「☆」は筆者の論

第一〇七段の内容について、最初から見て行きながら、問題点をあげ
てみたい。

①(第一段落)

「(1)女^レの物言ひかけたる返事、とりあへずよきほどにする男は、(2)あ
りがたきものぞとて、亀山院の御時、(3)しれたる(4)女房ども、若き男
達の参らるる毎に、「郭公や聞き給へる」と問ひて、「こころみられけるに、」
☆「女の☆ありがたきものぞ」を「とて」が受け、「しれたる女房ども」
に続けている。本来であるなら、「亀山印の御時、しれたる女房ども」が
先にくるべきところである。作者にとつて、いつ誰が言ったかよりも「女
の☆ありがたきものぞ」という内容に注目されていたものと思われる。
「ありがたし」とは「めつたにない」という意味。女の問いかけに、う
まく答えられる男は、めつたにいない、という内容なのだが、どうもこ
の言い方に兼好は不快感を覚えたように見受けられる。それは「しれた
る女房」と、単なる「女房」ではなくて「しれたる」が修飾しているこ
とでわかる。「しれ(しる)」は相当な軽蔑を示す表現であり、いきなり
この言葉を用いると言うのは、作者がよほど「女房」の男性への言い方

に反感に近いものを感じたからということになる。ここでは「ありがたき」がひきおこした「しれたる」という評価に注目したい。(2)「ありがたき」の「めつたにない」という意味も、不快感を引き起こした原因と考えたのである。

「なにがしの大納言とかやは、「数ならぬ身は、え聞き候はず」と答へられけり。」

☆女房どもの「郭公や聞き給へる」という問いに対し、「なにがしの大納言」は「数ならぬ身は、え聞き候はず」と答えたという。そして、もう一人が続く。

「堀川内大臣殿は、『岩倉にて聞きて候ひしやらん』と仰せられたりけるを、「これは難なし。数ならぬ身、むつかし」など定めあはれけり。☆「堀川内大臣殿」は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と答えた。女房どもに言わせると、大納言の回答はよくなく、内大臣の回答は、よい、ということである。これで、この「しれたる」女房の話題は終わっている。推測ではあるが、「むつかし」という女房の評価した言葉も兼好に不快感を与えたことと思われる。

② (第二段落)

「(5)すべて男をば、女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。」

☆ここで、突然のように「すべて」という言葉を用い、主題的な表現を

する。男は女に笑われないように育て上げるべきだ、というような内容である。「とぞ」がつくのは、聞き書き的に、作者がよく使う表現である。「すべて」が、続く表現を強調する、注目すべき単語となっているが、文末の「とぞ」という聞き書き的表現が、のちに兼好の否定的表現を導き出す暗示となっているようである。

『浄土寺前閑白殿は、幼くて、安喜門院のよく教へ参らせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞ』と、人の仰せられけるとかや。」

☆続いて、「浄土寺前閑白殿」について、「安喜門院」のしつけがよかつたので、お言葉などがよい、と人がおっしゃったことが記される。「とかや」とあるのでこれも聞き書きとなる。

「山階左大臣殿は、『あやしの下女の見奉るも、いとほつかしく、心づかひせらるる』とこそ、仰せられけれ。」

☆続いて、「山階左大臣殿」が、いやしい下女に見られるのも氣遣いされると、おっしゃったことが記される。「けれ」とあり、聞き書きの一首と見られるが、前例よりも聞き書き風ではない。

「(6)女のなき世なりせば、衣文も冠も、いかにもあれ、ひきつくるふ人も侍らじ。」

☆そして、第二段落のまとめである。反実仮想表現を使って、女がいるので男は言動・行動に注意されるものだと言っている。

☆要するに、この第二段落は「男は女に笑われるな」という不文律が、関白や左大臣などの権威ある人でも、要注意事項（教養事項）となつていふということや伝えたいわけであるが、最後に、反実仮想表現を用いているところに兼好のやや否定的なニュアンスを読み取ることも不可能ではない。

③（第三段落）

「(7)かく人にはぢらるる女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに、女の性は皆(8)ひがめり。」

☆ところで、第三段落ではまたまた突然「女の性は皆ひがめり」と、断定的に女について、「ひがめり」と酷評をする。出だしの「かく人にはぢらるる女」のみ(7)の「かく」と指示語があるので、前段を受けていることになるのであるが、「女の性は皆ひがめり」には、そう主張する根拠は、第二段落までにはいささかも存在しないように思われる。むしろ「女の性は皆ひがめり」と、ここから始めれば、立派なひとまとまりの段になるのであるが。(8)の「ひがめり」はキーワードとして注目しておきたい。

「人我の相深く、貪欲甚だしく、もの理を知らず、ただ(9)迷ひの方に心も早く移り、詞も巧に、苦しからぬ事をも問ふ時は言はず、用意あるかと思れば、又あさましき事まで、問はず語りに言ひ出す。」

☆続くこの部分はすべて女性批判である。この短い部分で、欠点を十以上述べている。まさにけんもほろろである。(9)の「迷ひ」という単語に

は注目しておきたい。

「深くたばかり飾れる事は、男の智恵にもまさりたかると思へば、その事、あとよりあらはるるを知らず。」

☆これも、前に続いて女性批判。ただこの部分は、それまでの女性批判よりはやや弱い表現になつている。

「すなほならずして拙きものは女なり。」

☆そして、ここで、女性論のまとめとする。これは「女の性は皆ひがめり」を受けているのである。第三段落は冒頭と文末を除いて見直すと、筋が通った「女性蔑視論」となる。

「その心に随ひてよく思はれん事は、心憂かるべし。」

☆女の心のままに、女によく思われるようなことは、情けないことだろうというのである。「その心」とは「拙き」女の考え、ということである。これで第三段落は終わりだが、女性論はここで終わらない

④（第四段落）

「(11)されば、何かは女のはづかしからん。」

☆(11)の「されば」で前段を受けて最終段落に入る。一般的には、この部分も第三段落に入れているのだが、本稿では、ここで段落分けをしておく。第二段落、第三段落の冒頭の一文の両方ともを、この「されば」が

受けていると考えられる。兼好の脳裏では、しつかり女性批判の流れが
できている。「されば」は、すぐ後に結論を述べるということで注意すべ
き単語である。したがって「何かは女のはづかしからん」が本段の結論
と考えておいてよい。

「もし賢女あらば、それもものうとく、すさまじかりなん。」

☆「賢女」を仮定して、そういう女性がいたとして、それともつまらない
というのである。悪くてもだめ、よくてもだめ、これでは女性の立場は
ない。本書中、「賢女」という語はこの例しかないが、「賢」という言葉
はいくつか存在する

「ただ(9)迷ひを主として、(11)かれに随ふ時、(12)やさしくも、(13)おも
しろくも覚ゆべき事なり。」

☆そして、ようやくまとめにかかった。この部分で初めて作者は、女性
について「やさしく」「おもしろく」と善の評価をしている。ただし、「迷
ひを主として」という但し書きがついての話である。前にも出てきたが、
(9)の「迷ひ」には注意が必要だ。(11)の「かれ」は「女」を指している
と考えられる。(12)「やさし」と(13)の「おもしろし」という評価にも注
意しておきたい。

☆以上、第一〇七段全体を通して、その構成(と内容)、さらに注意すべ
き単語を吟味した。

三、他の段の検証

本書では、女性に関わる段が次のように存在する。

第三段「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、

玉の杯の底なきこちぞすべき。(以下略)「

第八段「世の人の心まどはず事、色欲にはしかず。(以下略)「

第九段「女は髪のみでたからんこそ、人の目立つべかめれ。(以下略)「

第二六段「風も吹きあへずうつるふ人の心の花に、なれにし年月を思
へば、(以下略)「

第三二段「雪のおもしろう降りたりし朝、(以下略)「

第三二段「九月二十日のころ、ある人にさそはれ奉りて、(以下略)「

第三六段「久しくおとづれぬころ、いかばかり恨むらんと、(以下略)「

第一〇四段「荒れたる宿の、人目なきに、女のはばかり事あるころに
て、(以下略)「

第一〇五段「北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、(以
下略)「

第一〇六段「高野の証空上人、京へ上りけるに、細道にて、(以下略)「

(第一〇七段「女の物いひかけたる返事、とりあへずよきほどにする
男は、(以下略)「

第一八四段「相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。(以下略)「

第一九〇段「妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ。(以下
略)「

第二四〇段「しのぶの浦の海人の見るめも所せく、(以下略)」

☆以上について、本段(第一〇七段)以外の検証を行う。

第三段は、

「万にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうざうしく、玉の扨の当なき心地ぞすべき」という出だしである。

☆男性は、「色」を好むべきであるという主張である。恋に悩むことを肯定する。最後に「女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。」と記されている。

第八段は、

「世の人の心まどはす事、色欲にはしかず。」という出だしである。

☆有名な「久米の仙人」の話をあげて、男性を迷わすものの最たるものに「色欲」をあげている。ただしその男性について「愚かなるもの」と批評を加えている。

第九段は、

「女は髪のためだからんこそ、人の目たつべかめれ。」という出だしである。

☆第八段に連続する。第八段に触発されて(連想されて)書かれたものと考えられる。女性の本性は男性を迷わすことだと主張し、この迷いは

男性のすべてに通ずると断定する。最後に「みづから戒めて、恐るべく謹むべきはこのまどひなり。」と記す。

第二六段は、

「風も吹きあへずうつるふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、なき人の別れよりもまさりて悲しきものなれ。」という出だしである。

☆『古今集』の紀貫之の歌を重ね合わせて、さらに堀川院の百首の歌を引用し、恋愛した男女が離別した寂しさを述べる。ただし、具体性はほとんどない。「さびしき気色、さる事侍りけん。」とまとめる。

第三二段は、

「雪のおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべきことありて、文やるとて、」という出だしである。

☆この「人」は明確ではないが、一般に「女性」と考えられている。趣のある雪の朝に、雪のことを一言も記さない手紙に不快感をしめした女性を「をかし」と評価している。最後に、「今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし。」とあるので、亡き女性の追憶であるとわかる。続く次の段も同類である。

第三二段は、

「九月廿日の比、ある人に誘はれ奉りて、明くるまで月見歩く事侍りしに、思し出づる所ありて、案内させて入り給ひぬ。」という出だしである。

☆高貴な方の供としてある女性の家を訪れ、高貴な方が別れをつけて去っていつても、すぐに戸をしめず、余韻にひたっている女性を評価している。最後に、「その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。」とあるので、前段同様、亡き女性の追憶である。

第三六段は、

『久しくおとづれぬ比、いかばかりうらむらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、(以下略)』という出だしである。

☆久しく訪れない男性をせめるどころか、また交際しやすいようなメッセージをおくってきた女性の姿勢に賛同している。

第一〇四段は、

「荒れたる宿の、人目なきに、女のはばかり事あるころにて、つれづれと籠り居たるを、或人、とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、(以下略)」という出だしである。

☆高貴な方の、女性への訪問のお供をした作者が、女性の優雅な生活に感動する。最後に、その高貴な方のその女性への懐かしさを記している。「心にくし」「なつかし」「をかし」などの表現を用い、評価している。

第一〇五段は、

「北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、」という出だしである。

☆高貴な身分と思われる男女の物語する様子に感動する。「をかし」「ゆかし」などの表現を用い、評価している。

第一〇六段は、

「高野証空上人、京へのぼりけるに、細道にて、馬に乗りたる女行きあひたりけるが口ひきける男、あしくひきて聖の馬を堀へおとしてけり。」という出だしである。

☆馬に乗った女に、腹を立てる「聖」の話。とくに女性そのものを非難しているというわけではない。

第一八四段は、

「相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける。」という出だしである。☆北条時頼の母の儉約の精神を「ありがたし」と評価している。さらに「女性なれども聖人の心に通へり」と最大級の評価でまとめている。

第一九〇段は、

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。」という出だしである。

☆前半で、男の妻帯を戒め、後半で、女の批判をし、さらに男が時々訪れるのが男女の関係にもっともいいとしめくくっている。

第二四〇段は、

「しのぶの浦の蜚の見るめも所せく、くらぶの山も守る人繁からんに、わりなく通はん心の色こそ、浅からず、あはれと思ふふしぶしの、忘れがたきことも多からめ、」という出だしである。

☆この段については、兼好は、恋の体験のない媒酌結婚を否定するとう考えもある⁽²⁾。

四、第一九〇段の検証

女性論を述べている段の中で、本稿で取り扱う第一〇七段以外では、第一九〇段のみが個性的であった。兼好の女性観を知るのには、第一〇七段と同様、適当な段と見られる。そこで、第一九〇段について、ここで考察を加えることにする。

「妻といふものこそ、男の、持つまじきものなれ。」で始まる本段は、この冒頭の一文のとおり、男は妻を持つものではない、という主題で貫している。

本段は、前段、後段の二段に分かれるが、後段の冒頭は「いかなる女なりとも、明暮沿ひ見んには、いと心づきなく、にくかりなん。」となっている。これは本段の冒頭の主旨そのままに、現代風に言えば、男は結婚して同居などしないほうがいい、と主張しているのである。さらに「よ

そながら、ときどき通ひ住まん」ことが「絶えぬなからひ」となり、「めづらしかりぬべし」なのだと結論付けている。

要するに本段は女性蔑視でもなんでもなく、男女の夫婦のあり方につき、別居婚がいいと言うだけのことである。「全集」には一〇七段との関連が指摘されている⁽³⁾。

本稿で取り上げた一〇七段との関連は認めるが、女性批判になっているわけではないということである。したがって、女性を徹底的に批判しているのは、結局一〇七段しか存在しないということになる。言うならば、兼好は常に女性全てを目の敵にしているわけではない、それなりに評価した段も多いと言うことができる。

五、第一〇七段の再検証 — 単語について —

1、(1)女

本書では、この「女」は「男」に対し、「女性一般」として用いられている。もちろん「男」も「男性一般」として用いられている。したがってこの部分も、男女の一般論として使われている。

2、(2)ありがたし

もちろん、「めつたにない」という意味である。ここでの使われ方は、男女一般につき、「女」が問いかけた返事に、即上手い返答をする男は、めつたにない、という一般論である。もちろんこれは女性の立場での一般論であり、結論を先に言うならば、作者兼好にとつて、絶対に認められる一般論ではないのである。ちなみに本書に、「ありがたし」は全部

で二例、本例ともう二例除いてすべて、良い評価として用いられている。

「ありがたし」については、またの機会に検討する必要があるようだ。

3、(3)しれたる

「しる」とは「痴る」である。言うなれば「しれたる」は「愚かな」

という意味の、対象を罵る言葉である。本書中、この言葉が用いられているのは、この部分と、第四一段しかない。第四一段は、木の上で賀茂の競馬見物をしている法師が、居眠りして今にも落ちそうになるのを見た者が「嘲りあさみ」で、「よのしれものかな」と発言する部分がある。その発言を批判した兼好が「愚かなることはなほまさりたるものを」とまとめるくだりである。ここから判断すると、「しる」は相当相手を嘲り非難する言葉に相違ない。この言葉が、次の「女房」を修飾しているところがポイントと考えられる。

4、(4)女房(ども)

「女房」という言葉は本書に10例存在する。ただし、「女」と同様に、とくに「女房」そのものを非難していると思われる例は他にはない。こゝは、3で述べたように「しれたる」という表現が「女房」を修飾しているのが問題なのである。付け加えれば、「女房ども」の「ども」も侮蔑のニュアンスがある。ここで兼好の脳裏には、「特定の、どうしようもない女房どもの面影」が浮かび、その流れで第一〇七段は書かれたということが推定される。

5、(8)ひがめる

「ひがめる」の「ひがめ」は、ひねくれている意の動詞、「ひがむ」で

ある。本書では、この単語はここにしか使われていない。しかも、これが「女」一般を対象としても用いられていることが特徴である。なお「ひがひがし」という類語が一例のみ存在するが、それは相当強く非難する場面に使われている。「ひがむ」は本段において相当重要な意味・役割を担っていることが推定される。

6、(9)まよひ

「迷ひの方にも早く移り」として使われている。また後に「迷ひを主として」ともう一度出現する。「まよひ」は、本書中に三例しかない。そのうち、二例が本段である。残りのもう一段は「俗世間」に対する「まよひ」である。ここで、二度「まよひ」を女性に使用したことは「まよひ」の元凶として、女性にターゲットを絞ったものとして注目しておきたい。

7、(10)されば

「されば」以下は、通常、もつとも主張したい内容がくる。つまり以下の「何かは女のはづかしからん」はもつとも言いたいことということになる。前述したように、以下に続く「何かは女のはづかしからん」が本段の兼好の主張であり、これをもって、結論と言いつ換えることができる。

8、(11)かれ

「迷ひを主として、かれに随ふ時」とある。「こゝでの「かれ」は「女」を指すものと考えられる。この「かれ」を「迷ひ」とする考えも提示されているが、⁽⁴⁾本書中の六例の「かれ」のうち、精神的なものを指す「か

れ」は存在しないこともあり、また、「迷ひ」を指すとすれば、むしろ存在しない方が、文意が明確になるので、その説は肯定できない。

9、(12) やさし

この「やさし」は、趣があるほどの意味であり、続く10の「おもしろく」とセットになって、「かれ」(女)を評価している。本書中に、「やさし」は四例あり、うち三例が「おもしろし」とセットになっている。例外の一例は和歌に用いられているので、「やさし」は「おもしろし」とセットで使用するのが兼好の好みだったのであろう。

10、(13) おもしろし

「おもしろし」も「やさし」の類語であり、9で述べたように、セットで「かれ(女)」を評価している。本書中に「おもしろし」は九例あり、本例以外はすべて自然・音楽など優雅な対象に用いられている。つまり「おもしろし」は高級な評価と言うことになる。

「女房」から始まり、「女」(女性)一般への、徹底した否定と非難の流れを、最後に一転して評価しているところには注意が必要であろう。つまり兼好が女性を評価するのは、「迷ひ」の中以外にありえない、ということなのである。あくまで「女」は「男」を「迷ひ」の世界に引きずり込む対象だという考えが、兼好の根底にはひそんでいるようだ。

六、第二〇七段の再検証 — 構成について —

ここで本段の構成を再検証してみる。

① 第一段落

「女の物言ひかけたる返事」に始まり、「しれたる女房ども」の、高貴な男性の品定めを述べる。事実を述べるだけのようだが、「しれたる」という言葉は、相当兼好の思いのこもった強力な表現であり、簡単には見過ごせない。

② 第二段落

「すべて男をば、女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。」で始まり、やはり高貴な男性二人をとりあげ、いずれも女性への心遣いをモットーにしていたことが、事実として述べられる。段落最後で「女のなき世なりせば、衣文も冠も、いかにもあれ、ひきつくるふ人も侍らじ」とその事実を肯定する表現でまとめている。ここまでは首尾一貫とまではいかないまでも、一つの事件を受けた見解として、それなりのまとまりを持っているのだが、次段落で、突如兼好の、女性への非難が述べられる。

③ 第三段落

「かく人に恥ぢらるる女、如何ばかりいみじきものぞと思ふに、女性の皆ひがめり。」で始まり、以下、「女」を徹底的に、非難し、罵り続ける。この冒頭の最初に「かく」とあるので、兼好の論の流れとして、②を受けていることは間違いない。②では、高貴な方のモットーを述べているので、自然な流れとしては、女性がいるからこの世は、とくに男性はとり整えられるのである、となるべきである。

本段落の主旨は「すなほならずして拙きものは女なり」に尽きるであらう。ならば③は、①を直接意識していることになる。②をいれたのは、

高貴な方々を含めての警鐘という意味で存在させたということならうな
ずける。むしろ②がなくて、①に続けて③をおき、「かく人にはぢらるる
女」を「かく人を定めあふ女」とでもすれば全体の構成はすつきりとな
るのだ。もしくは接続表現を多少変えても、②を第一段落の①におき、
それへの反論として、②↓①↓③↓④と言う構成にすべきだった。なぜ
そうしなかったかという原因は、現段階では、判断できない。

④第四段落

「されば、何かは女のはづかしからん。」から始まる。「されば」があ
るので「何かは女のはづかしからん。」が、本段のもっとも主張したい一
文と考えられる。兼好の本当に言いたかったことは「女」に気を遣う上
流階級の慣習に抗議したかったのか、とも思われる。

さらに「もし賢女あらば、それもものうとく、すさまじかりなん。」と、
わざわざ「賢女」をまで取り上げて、それすら否定する。本段での兼好
の姿勢は、女性全てを認めないという強硬なものである。

しかし、ここで終わらずに、段落末尾を「ただ迷ひを主として、かれ
に随ふ時、やさしくも、おもしろくも覚ゆべき事なり。」と記してあるの
には注意が必要だ。女性全面的否定の中で「迷ひ」という世界での存在
だけを、認めるのである。「迷ひ」はよい言葉ではない。否定的な言葉だ
が、兼好の脳裏には「女は男を『迷』わせる存在だ」という意識が宿つ
ていたことは確かだろう。

七、先学の説 「☆」が筆者の論

ここでは、本段に関わる先学の説をとりあげてみたい。

1、『古典文学全集』⁽⁵⁾

「兼好としては迷いの克服を志向すればするほど、冷厳な批判に傾か
ざるをえなかつ

たに相違ない。」

☆兼好が「迷いの克服を志向」しているのか、「冷厳な批判」をしている
のか、という

ところに問題がある。

2、『研究と講説』⁽⁶⁾

「女性に蔑視されることはどんな場合でも良くないことだという兼好
の考え方は、第七段の、『すべて、男は女に笑はれぬように生し立
つべし』との男性教育説に発展している。」(第三段解説)

「兼好は、ここで反転した居直りで、辛辣で否定的な女性観を展開す
ることになる。」

「しかし、最後の段階で、女の価値を一つだけ認める。『ただ迷いをあ
るじとして』男性が相手との恋に身をゆだねた場合、女性は「やさし
さ」「おもしろさ」をもった愛すべき存在に豹変するのだと。女は恋
において、はじめて美の女神になることを兼好は見抜いているのであ
る。これは兼好の的確な女心探究であろう。」

☆「男性教育説に発展」しているのか、「女は〜」以下などと言うことが
言えるのが問題である。なお、「反転した居直り」というのは面白

い発想であると思う。

3、『徒然草』全注釈⁽⁷⁾

「この段は、本書中でも、兼好の女性観・女人論として、異彩を放っている。」

「(他の段は)この段のように、女性をつき放して、冷酷に観察し、批評したのではないのである。」

「この転回の烈しさは、言うまでもなく、女性に対する執着を放棄し、女性をつき放して観察し、評論しようとする、男性的立場の高揚であるが、よく読んでみると、鋭く、女性の本質・本態を把握していることに気づかされる。」

「女性批評の急所は、『すなほならずして拙きものは、女なり』の一句に要約される。」

「男性との比較から、女性をこきおろして、痛快なものがある。」

「結局、女性に執着することは迷妄であり、愚かであることを主張していることになるのである。」

「若い時の深刻な失恋の経験があり、それが後々まで跡を引いていて、

☆「女性をつき放して、冷酷に観察し、批評し」ているのか、「男性との比較から、女性をこきおろしていて痛快」などと言えるのか、「若い時の深刻な失恋の経験」などと軽はずみに述べていいものか、などが問題である。

4、『徒然草』講座⁽⁸⁾

「かくて、前段のエピソードは、一旦提示されながらも忽ち消去されて、あくまで男性にとつて女性は「恥づ」べき存在ではないという認識と主張に急転してしまう。兼好は冷徹な目なざしで女の「仮象」の姿を見抜いたのであるが、同時に、彼の辛辣な批判の矢は、世の男どもに向けても放たれているのである。」

「第一〇七段の結文の意は、次のごとくなるう。

(男も)(女も)ただ(色欲の)迷いを主としてその迷いに仕える時、(即ち色欲の迷いに心が移る時)、(女は真に魅力ある存在となり、) (また、男は女の真の魅力にふれることができ、) (その時、女は、男にとつて)「やさしくも、おもしろくも覚ゆべき事なり。」

(中略)「迷ひを主としてかれに従ふ」の「かれ」を「迷ひ」と解し、右表のように、結文の前半を、男女両性の二つの脈絡の共存と見る立場を、試見として私はここに提示したい。結文をこのように見る時、本章段は単なる女性批判・否定的女性論の域を越え、「人間というものの性」に根源的に迫ったものとして、兼好の言おうとした本旨が明確になってくるように思えるのである。」

☆「彼の辛辣な批判の矢は、世の男どもに向けても放たれている」などと言えるのか、『人間というものの性』に根源的に迫ったもの「などと最大級の評価をしていいのか、そして就中、『彼』を『迷ひ』と解し」ても良いものか、という問題がある。

5、「徒然草」の鑑賞と批評⁽⁹⁾

「次に第三の部分、『かく人に恥ぢらるる女』以下は、一転した筆づかいで女性の欠点を痛烈に指摘して、兼好には、何か女性に対する決定的な恨みがあるのではないか、と思わせる部分である。」

「そうして、結局、こういう女性の心に迎合してよく思われようというの、まことにいやなことであろう。男性は女性に対しどういう態度でつき合つたらよいか、十分考えてみよう、というのが、ここでいおうとしていることである。」

☆「女性に対する決定的な恨み」というのは面白いが、「男性が女性に対して」以下は、本当にそんなことが言えるのが問題である。

以上先人の説を五つあげてみた。本段の論が急展開して女性の徹底的な批判にむかっているという流れについてはいずれも一致している。問題は、その展開（構成）のとらえ方ということになる。

1 について、「迷いの克服」であるが、本文では「迷ひの方に心も早く移り」「ただ迷ひを主として、かれに随ふ」とあるのみで、これだけで「克服」という表現は使えない。

また、「冷厳な批判」は微妙であり、これは受け取り方によって異なってくるが、理詰め③が位置付けられないところに、すぐには従えないというところである。

2 について、「男性教育説」は兼好の主張ではない。冒頭の一文は文末に「とぞ」がついていることで聞ききとわかる。問題は最後の一文「女

のなき世なりせば」という表現である。これは「男性教育説」と言えないことはない。しかし、ここで止まらず③の、急転した女性批判に直接続くところに、容易にそうは受け取れない面がある。

3 についても、「女性をつき放して、冷酷に観察し、批評」するならば、突然のように③が記されることはないと思う。「冷酷に観察し、批評」は、理詰めすぎるものと思う。続く「男性との」や「若い時の」は論文の内容としては不適な表現であると思う。

4 について、批判は、はたして「世の男どもに向けても放たれている」のか疑問。というのは「男子よこうあれ」というような表現はどこにもないからである。またこの論の展開では『人間というものの』なども確定できないであろう。とくに「ただ迷ひを主として、かれに随ふ時、」の「かれ」を「迷ひ」とするのは無理がある。それなら、常識的に「ただ迷ひを主として、随ふ時、」と「かれ」をいれる必要などないからである。それを強調だとするのは、強引にすぎるだろう。

5 について、「男性は女性に対して」というのも、憶測としかいえない。どこにも具体的な根拠などないからである。

八、結論

本段は、激しく強硬に、個人的な恨みがあるごとく、女性を徹底的に糾弾する部分にかなりのスペースを割いて記してあるところに特徴があった。

彼の女性評価は、全体的にみれば、それなりに男性評価と同一レベル

で、とくに女性差別観を持っているというわけではない。全体の女性観はまた別の機会に譲ることにして、本稿では、なぜこの部分にだけこのように、強硬に女性批判がたたみかけるように述べられるのかを問題にしたのであった。

先学の説のいくつかを見てきたが、本段を必要以上に評価（肯定）する傾向にあると思われる。大事なことは②具体的な表現（言葉）と構成（内容・論理の展開）に注目することである。4の「結文」⁽¹⁰⁾については一考に値するかもしれないが、そのように複雑に分析、深読みをするのもいかがかと思う。

今の時点では「しれたる女房」の「しれたる」が本段の鍵を握っていると考えている。また「亀山院の御時」とあることも、兼好本人のパラメーターを物語っているのかもしれない。この点について、5で『増鏡』から、亀山院の世界を取り上げているのは、注目に値する。

兼好にとつてみれば、（亀山院の）「しれたる女房」に、何かしらの悪感情があつたのかもしれない。もちろんこれは憶測ではなくて推測である。

「堀川内大臣」「浄土寺前閑白」「安喜門院」「山階左大臣」などについても背景を知る必要があるかと思われる。

最大の問題は③（第三段落）が唐突に女性批判にはしつてしまうように見えることであつた。しかし、ここで「迷ひ」が記され、④でも「迷ひ」が記されることから、兼好が女の本質は「迷ひ」にあると考えていたことは確実である。その点では一貫性はないとは言えない。④に「何

かは女のはづかしからん」とあるので、②の冒頭の一文、③の冒頭の一文をしっかりと意識していると思われる。兼好としては②は決して急展開ではなかったのかもしれない。本段は兼好の女性論の非難の極限として位置づけ、他の段との関連をさらに考えることが必要であろう。

注

- (1) 日本古典文学全集『徒然草』（小学館・安良岡康作）
- (2) 「第百四段・第百五段でも、恋の情趣を耽美的な筆致で描写した兼好は、忍ぶ恋を美しいものとし、女は恋に生きる時美しく変貌することを述べてきた。／＼ここでは再び兼好の結婚論が述べられるが、普通の結婚と対比させて、忍ぶ恋を経過して結ばれた恋愛結婚とを比較論的な視点から論じている。（中略）恋の体験のない結婚、愛情が基礎となっていないそれは、退屈で無意味であると考え、だから恋の体験のない媒酌結婚を否定するのである。」
- 『徒然草』研究と講説（桜楓社・佐々木清）
- (3) 「百七段の立場からの発言であるが、愛情の新鮮さを保つために、「よそながら、ときどき通ひ住」む生活を望ましいとするところには、業平や光源氏の像も念頭にあつたであろう。」（日本古典文学全集『徒然草』による）
- (4) 「迷ひを主としてかれに従ふ」の「かれ」を「迷ひ」と解し、（中略）結文の前半を、男女両性の二つの脈絡の共存と見る立場を、試見として私はここに提示したい。（『徒然草』講座（有精堂・小泉弘）による）
- (5) 日本古典文学全集『徒然草』（小学館・安良岡康作）

- (6) 『徒然草』 研究と講説 (桜楓社・佐々木清)
- (7) 『徒然草』 全注釈 (角川書店・安良岡康作)
- (8) 『徒然草』 講座 (有精堂・小泉弘)
- (9) 『徒然草』 の鑑賞と批評 (明治書院・桑原博史)
- (10) (男も) (女も) (色欲の) 迷いを主としてその迷いに仕える時、(即ち色欲の迷いに心が移る時)、(女は真に魅力ある存在となり)、(また、男は女の真の魅力にふれることができ)、(その時、女は、男にとって)「やさしくも、おもしろくも覚ゆべき事なり。」
- 以上、結文のとらえ方をしめす (『徒然草』 講座による)
- (11) 『徒然草』 の鑑賞と批評による